

第28回 東海外来小児科学研究会のご案内

謹啓 時下、先生方におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。
さて、この度下記の要領にて第28回東海外来小児科学研究会を開催致します。
例年通り前期研究会は特別講演での開催となりますが、今回はワクチン、小児外科、性教育についての講演を企画致しました。
皆様の理解を深め、よりよい診療に生かして頂ければ幸いです。特に研究会・外来小児科学会員に限りませんので、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成27年4月12日(日)
13時30分～16時45分

会場：愛知県産業労働センター ウィンクあいち
10階 1002会議室
〒450-0002
愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38
TEL: 052-571-6131 (受付 9:00～20:00)
FAX: 052-571-6132
<http://www.winc-aichi.jp/>



MSD株式会社

- ◆ 製品紹介 ◆ 13:30～13:40
- ◆ 開会の挨拶 ◆ 13:40～13:45
- 世話人代表 落合小児科医院 院長 落合 仁

1) 指示系

- ◆ 講演1 ◆ 13:45～14:30
- 座長 落合小児科医院 院長 落合 仁

2)

『 新しく日本に導入された細菌性髄膜炎予防ワクチンについて

～4価髄膜炎ワクチン、PCV13、ヒブワクチンの効果と課題～』

演者 独立行政法人 国立病院機構 三重病院 臨床研究部長 菅 秀 先生

- ◆ 講演2 ◆ 14:35～15:20
- 座長 近藤小児科医院 院長 近藤 久

『 小児外来で、よくみる小児外科疾患について 』

演者 藤田保健衛生大学 板文種報徳会病院 小児外科 教授 富重 博一 先生

- ◆ 特別講演 ◆ 15:25～16:45
- 座長 蜂谷医院 副院長 蜂谷 明子

『 学校で「性教育」をどう教えるか？

～セクシャルヘルスとメンタルヘルスの総合的アプローチ～

—WYSH教育の視点から— 』

演者 京都大学大学院 医学研究科 社会疫学分野 准教授 木原 雅子 先生

東海外来小児科学研究会世話人

愛知県	大西正純	鈴木研史	千原 克	川井 進	松川武平	近藤康人
岐阜県	矢嶋茂裕	若園明裕	中島俊彦	蜂谷明子		
三重県	落合 仁 (代表)	稲持英樹	梅本正和	種田 寛	近藤 久 (事務局)	
	上荷裕広 (会計)					

※ 日本小児科学専門医制度研修集会として5単位が取得できます。
※ 本会におきましては、規則により旅費の負担が出来ませんことをご了承ください。
※ 当日参加費として3,000円を申し受けます。(メディカル・スタッフのかたは500円)

Main body of handwritten text, consisting of several lines of cursive script.

Second main body of handwritten text, separated from the first by a horizontal line.

Third main body of handwritten text, separated from the second by a horizontal line.

第 27 回東海外来小児科学研究会 二次抄録

WS1：外来で食物アレルギーを診る・食物経口負荷試験を中心に

リーダー：寺田明彦（てらだアレルギーこどもクリニック院長）

サブリーダー：近藤久（近藤小児科医院）

コメンテーター：藤澤隆夫（国立病院機構三重病院・副院長）

参加者 24 名（医師 21 名・看護師 1 名・管理栄養士 2 名）

リーダーの寺田先生より、ご挨拶いただき、サブリーダーの近藤が事前アンケートの結果を報告した。74 施設より、回答いただき、外来で食物負荷試験を実施している施設は 25 施設であった。実施回数は、7 割が週 1 回未満で、週 1 回が 4 施設、週 2 回が 3 施設、週 3 回以上の施設はなかった。8 割近くが食物アレルギー負荷試験ガイドライン（協和企画）を参考にしており、7 割の先生が、自ら試験にあたり、食材は 9 割が患者さんに準備していただいていた。試験によるアナフィラキシーの経験は 24%あり、12%に救急搬送の経験があつた。引き続き、クリニックの外来負荷試験について、渡辺先生（すずかこどもクリニック）、井上先生（いのうえ小児科アレルギー科クリニック）、川田先生（かわだ小児科アレルギークリニック）より自験例を中心に講演していただいた。

渡辺先生には患者さんとの強い信頼関係があつてこそできる、積極的な食物負荷試験の例を紹介していただき、井上先生は外来での、限界を把握した上で、症例を選択し、安全性を踏まえた多くの負荷試験の成績を報告していただいた。

川田先生からは、専門性の高い、豊富な経験に基づいた「待合室での負荷試験」の報告があり、より多くの患者さんの負荷試験に取り組んでみえることが報告された。

食物アレルギー診療の基本である、正しい診断に基づく必要最小限の除去のためには、負荷試験が不可欠であることは小児科開業医に十分、認識されていることが確認できたが、実際には各施設で患者さんのニーズや、医師のアレルギー診療レベルや経験で特色が認められた。外来で安全に実施できる食物負荷試験の対象患者の適応・選択、忙しい一般診療時間の中で、いかに安全に行える実施方法などが今後の検討課題と結論づけられた。

参加の先生方から、実際的な質問や多くの意見が出され、活発な討議がなされた。

最後に、コメンテーターとして参加していただいた藤澤先生より、食物負荷試験の理論と実際につき、三重病院でのデータも含めた、たいへんわかりやすいレクチャーしていただき、参加者にとって、たいへん実り多い WS を開催できた。スムーズな進行と、充実した討議は、リーダーをお願いした寺田先生の手腕のよるところが大きく、改めて深謝いたします。（文責：サブリーダー近藤）

WS - 2 テーマ「学校医のあり方」

リーダー 松川武平

サブリーダー 佐々木邦明

サブリーダー 駒田幹彦

コメンテーター 後藤正己 他参加者 8 名

〈目的〉知的障害のない発達障害児の増加、家庭環境・社会環境の変化による心的ストレス増加、登校拒否症やいじめの増加などメンタルケアの必要な子どもたちが増えて来て居り、学校現場では対応が問題になっております。文部科学省では学校医の役割りの一つとして「子どものメンタルヘルスについて医療的な見地から学校を支援する」と謳っています。今回行ったアンケート結果を元に学校医のあり方について討論をしたい。

〈アンケート結果〉回答数 148 件〔愛知県 94 件（内名古屋市 52 件）、三重県 44 件、岐阜県 10 件〕でした。学校への訪問回数は名古屋市は年間 6 回以上の割合が多く、その他の地域では 3~6 回が多かった。健診以

外での関わりとしては、名古屋市では就学指導委員会に出席している事が多く、他の地域では少ないようでした。学校および養護教諭との連携は地域差なくおおむね取れていました。しかし学校医として発達障害児やいじめ、虐待に関わる事は少なく、学校から相談を受けることもあまりないようでした。就学指導委員会で発達障害児の対応ができていないかとの問いに対して、70%近くがまずまず出来ていると答えている反面、学校は将来を見越した指導が出来ているかとの問いにたしては半数以上の方が余りできていないと答えられている。

〈討議内容〉各地区での発達障害児の対応についてお話を頂きました。発達障害児に対して学校側からは診断を要求されることが多く、診断されていたほうがその後の体制がとりやすい様です。三重県名張市では5歳児健診でほとんどが引っかかり、全幼児の13～15%に上る様です。入学前に4回会議が行われ判定され、特別支援事業から小学校に連絡が上がるとの事でした。入学後に診断される事は少ないとの事でした。鈴鹿市では5歳児健診は行っていない様ですが、入学前に大方診断が付き療育支援が行われているとの事でした。岐阜市では5歳児健診が行われているが、各務ヶ原市では5歳児健診は行われておらず、学校にどう対応したらいいか混乱があるとの事です。人口10万単位だと動きやすく、家庭の状況も把握されやすい。蒲郡や岡崎は幼児期から診断され、入学後もスムーズに対応されているようです。三重県では就学指導委員会は一部で精神科医などの専門医が行っており、名古屋市では学校医が指導を行っている。名古屋市では入学前に行政が関わることはなく、入学後に問題が露見する事も多い。昨年行った名古屋市の小中学校へのアンケートでも困っているとの報告が多く学校現場は混乱しているようで、発達障害児への支援システムがまだ出来ていないのが現状です。学校医は学校との関わりを多くする、先生との関係を良くする事が重要であるとの意見が述べられました。また学校カウンセラー、トラブルメーカーの親、貧困、登校拒否、虐待、色覚検査、感染情報などの話題も取り上げられました。

WS-3 「発達障害の理解を深めるために」

～体験によってあなたも検査の理解に自信ができる！

発達検査 WISC-IVを体験しよう～

リーダー 蜂谷 明子（岐阜県恵那市）
サブリーダー 梅本 正和（三重県津市）
テスター&コメンテーター 川瀬 正裕（金城大学教授）

『目的』

私達は発達障害をはじめとする個性や特性が強い子ども達に、診察室や学校や健診現場などにおいて度々接します。保護者や幼保学校現場はその子ども達の多様な姿を目の前にして、対応に困難感を持ち疲弊した状況を感じることも少なくないでしょう。発達障害が社会的にも認知が広がり、小児科の医療現場においても相談や支援を求められることも多くなっています。

今回はそういった子ども達を理解するために WISC-IVを、金城大学 人間科学部 多元心理学科教授の川瀬正裕先生にテスターをお願いし受験体験し、さらにテストバッテリーを組み合わせる頂き、子ども理解のためのレクチャーをお願いしました。子どもが受ける検査の体験を通して、発達障害の知識と理解、柔軟な思考を持つための一助となるWSを目指します。

『実施状況』（参加者24名、全員医師）

- 1) 各自の自己紹介：まずはそれぞれ、発達障害に対して学ぶ意欲を語り合いました。
- 2) WISC-IV受験体験：4つのグループに分かれて金城大学院生によってテストを受けました。それぞれが積み木を積んだり、自分の用紙に書き込んだりしながらも、笑い声が湧き上がって楽しく受験体験をしました。
- 3) バウムテストのレクチャー
- 4) WISC-IV検査の理解の講義
- 5) 心理療法におけるコラージュ療法の説明

他、リーダーが他の心理検査や乳幼児発達検査の紹介をしました。

『参加後アンケート結果』

満足度に関して、全員が80%以上と概ね好評でした。過半数の参加者が100%満足と回答頂きました。

記述では「明日からの診療にすぐに役にたつ」という感想が多くありました。次に目立ったのは「小児科医として今後どの程度、関わって行けばいいのか、改めて考えます。」というものでした。これは発達障害との関わりを今より積極的にしようとの意欲と思われまます。それぞれの参加者がひとつステップアップしたことは確かだと感じました。

WS-4 「メディカルスタッフによる予防接種の支援と工夫 ～すべての赤ちゃんに HB ワクチン接種を勧めましょう～」

リーダー： 土屋 千枝（看、川井小児科クリニック、日進市）
サブリーダー： 西村 美鈴（看、近藤小児科医院、桑名市）、
下地 富士子、酒井まゆみ（看、松川クリニック、名古屋市）、
西川 美緒（事、落合小児科医院、亀山市）
コメンテーター：菊池 均（名鉄病院 予防接種センター）
参加者 看護師23名 事務5名 その他3名

近年、予防接種の種類と接種回数が増え、私達メディカルスタッフも予防接種に関する業務が多くなった。予防接種の普及は大切ですが、各医療機関で予防接種の間違ひが多くなり、25年度の愛知県予防接種事故発生件数は448件と報告された。予防接種事故を防ぐ為に我々スタッフは日々工夫を重ねて来ていると思われる。予防接種の際にどのような工夫、チェックが必要かを話し合い、工夫を学びあうためのワークショップとした。

第一部では11の参加医療機関で行っている予防接種に対する工夫や支援をスライド写真で報告しあつた。その後①ワクチン有効期限のチェック方法②接種量、種類を間違えない工夫③接種間隔のチェック方法④兄弟同時接種、同姓同名の接種の工夫という内容で、4つのテーブルに分かれて話し合つた。活発な意見交換が出来た。全ての医療機関でその施設に合つた工夫がされている事が良くわかり、それぞれ参考に出来る事を学ぶ事が出来た。

第二部は、「すべての赤ちゃんに HB ワクチン接種を勧めよう」のテーマで名鉄病院予防接種センター菊池均先生に講演をして頂いた後、沢山の質問に答えて頂きとても勉強になった。